「おなじ蓮に」考

細田季男
（札幌新川高校教諭）

はじめに

和製漢語「一蓮托生」の成立は平安朝を相当に降るものの、極楽の蓮の上までも変わらぬ思いでいたい―「おなじ蓮に」という願いがはっきりと表出されるのは、『源氏物語』が最初である。本論ではまず、こうした願いがどのような過程を経て文学作品に登場するに至ったのかを探ってみることとする。

また、『紫明抄』は後掲4「鈴虫」、5「みのり」の用例の出典として、唐中期の僧法照の『浄土五会念仏略法事儀讃』所収「往生楽願文」の一節「一々池中花尽満、花々惣是往生人、各留半座乗花葉、待我閻浮同行人」を挙げた。その後古注はこうした指摘を繰り返すこととなり、それは現代の古典の注釈書類にも及んでいるが、このこと

についても今一度検証してみることとする。

「五会念仏」は、唐代の僧法照（生年、寂年、世寿ともに未詳）が制定した勤行式で、念仏を五段階に分けて唱えるところからその名がある。法照は大歴元年（766）四月に衡山弥陀台で九〇日の般舟三昧の勤行をする誓願を起こす。そして、同年夏、二七日目の念仏三昧を修している時、禅定の境地に入って阿弥陀如来から授けられたものであるという。「五会」について法照は『浄土五会念仏略法事儀讃』（779年頃、一説に徳宗の代779～805年成立）本に「五とは会にして是れ数なり、会とは集会なり。彼の五種の音声は緩より急に至りて唯仏法僧を念じて更に雑念なし。念とは則ち無念にして、仏の不二門なり。声とは則ち無常第一義なり。故に終日仏を念ずれども恒に真性に順じ、終日、生ぜんことを願ずれども常に妙理ならしむ」とし、具体的には、第一会は平声にして緩く南無阿弥陀仏を称念し、第二会は平上声にして緩く称念し、第三会は非緩非急に称念し、第四会は漸く急に称念し、第五会は阿弥陀仏の四字のみを転た急に称念するという方法を説く。さらには同書において、この念仏の法が「この生に於て能く五濁煩悩を離れんとす。五苦を除き、五蓋を断ち、五趣を截り、五眼を浄め、五根を具し、五力を成じて菩提を得、五解脱を具して速かに能く五分身法を成就す。（中略）この一形を尽くさば、頓に最後凡夫の身を捨てて極楽国に生じ、菩薩の聖位に入り、不退転を得て疾く菩提に至る」と、その利益をあらわしている。貞元（785～804）の頃、法照は五台山に竹林寺を創建し、[*1] その後開成五年（840、承和七年）、十五日間にわたってこの寺に滞在し、五会念仏を伝承したのが慈覚大師円仁である（『入唐新求聖教目録』にも、『浄土五会念仏略法事儀讃』の名が見える）。帰朝後、円仁はこの念仏を叡山に移植することとなるが、これが天台的浄土教興隆の直接の起源である。[*2] よって以降、本朝の天台の僧侶はもとより、他宗の僧侶や貴族に至るまで、この一節「一々池中花尽満、花々惣是

往生人、各留半座乗花葉、待我閻浮同行人」を知っていた蓋然性は高い。

以下に、『浄土五会念仏略法事儀讃』本末所収「往生楽願文」の全文を示してみる。

得生浄土報師恩
人能念仏仏還念　専心想仏仏知人
一切迴心向安楽　即見真金功徳身
浄土荘厳諸聖衆　籠籠常在行人前
行者見已心歓喜　終時従仏坐金蓮
一念乗台到仏会　即証不退入三賢
一々池中花尽満　花々惣是往生人
寧合金花百千劫　不願地獄須臾間
各留半坐乗花葉　待我閻浮同行人
寄語娑婆修行者　念々精勤莫睡眠
乗此因縁生浄土　畢命為期到仏前

『浄土五会念仏略法事儀讃』本末二巻（浄土宗全書6　末　往生楽願文）

ここに言う「同行人」とは、たとえば『摩訶止観』巻第四下第一節　第五項に「二同行者。行隨自意及安楽行未必須伴。方等般舟行法決須好伴。更相策発不眠不散。日有其新切磋琢磨。同心斉志如乗一船。互相敬重如視世尊。是名同行。」とある様に、あくまでも同じ修行を積んだ者同士の謂であること、明らかである。そうした者同士にし

て初めて、極楽の同じ蓮に並んで座ることができるのである。そもそも男女の情愛などに絆されていては、極楽往生すらおぼつかない。しかし、志を一つにして勤に励む二人が同じ蓮に化生するという表現が、本朝においてはどうしてほとんど男女、とりわけ夫婦に関してさかんに言われるようになったのかという疑問がここに生じるのである。

一

本論の末尾に挙げた資料1の上三段は、「世を越えた男女の契り、思い、縁、再会」に関わる和歌を、「おなじ蓮に」の願いが初出する『源氏物語』成立頃までの時代を大まかに区切って、拾ったものである。ただし、「さきの世」や、「わたり川」「みつせ川」「後瀬の山」「死出の山」といった、来世へ行く通過点を詠んだものは、今回の考察に直接関わらないものとして、除外してある。

さて、表の上段は主に「世、後の世、こん世」をキーワードとして拾ったものであるが、その用例は決して多くはない。後の世の再会に懐疑的であったり、「後の世への意識はたぶんに現実的な執心の裏返し」[*3]であるといった表現が並ぶが、すべての和歌作品に占める割合は、非常に小さいものと言える。一方、三段目は主に浄土にかかわって詠まれた男女の歌を集めたものである。[*4] 早く『古今和歌六帖』第五雑思に藤原忠房（～延長三年928）の歌として、「このよにもあはずなりなばこんよにもあはんかならずにしのじやうどに」の歌が見える。漠然と極楽浄土での再会を契るものであるが、これが「おなじ蓮に」という表現に厳しく焦点を結ぶまでの間、「のちの世」の契りとして注目すべきは、やはり「長恨歌」の影響が挙げられよう。二段目は直接「長恨歌」を詠んだもの、またはその影

響下に詠まれたもので、「連理」「比翼」といった「ながき契り」に関係の深い歌に限って挙げてあるが、天上界や地上界に生まれ変わっても夫婦でいようとする「長恨歌」の誓いは、貴族達に強烈な印象を与え、「のちの世まで」と契る男女の情交を表現する際甚大な影響を及ぼした。

また、一番下の段には願文を挙げた。この間、女性の死を追善する願文に、今は亡き女性を楊貴妃に喩え、「長恨歌」の詩句を駆使し、その後九品蓮台に上ることを願うといった表現パターンが、繰り返し述べられるようになる。『本朝文粋』巻十四所収の作品を三つ挙げてあるが、これは「長恨歌」の詩句によって書かれたと判断される部分[*5]に続けて、願文の最後の方の、極楽往生を願う部分を続けて引用したものである。四例目は『言泉集』亡夫帖・亡妻帖所収の摘句であるが、これもおそらく願文の最後の方では、西方極楽に往生することを願った句が、配置されていたものと考えられる。今生での男女の愛情の強さを表現するにあたって、「長き契り」を交わす際、「長恨歌」が格好の材料を貴族に与えたことは先に述べたが、さらに「長恨歌」はこのように浄土との関わりをもって、繰り返し語られるようになる。そして、「比翼」「連理」がむなしき誓いととらえられる時、そうした誓いに匹敵する一体感を持ち、さらにそれを宗教的（仏教的）に超越する願いとしての「おなじ蓮に」が、仮名文学の世界に必要とされるに至った。『源氏物語』までの流れをとらえた時、以上のようなことが言えるであろう。今生で「連理」「比翼」を誓った桐壺帝と桐壺の更衣の物語がはかなく終わりを告げて以降は、男女の来世での究極の願いは、すべて「おなじ蓮に」ということになるのである。[*6]

1　阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ。おなじ蓮にとこそは、

（源氏）なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ　　朝顔　2―496

2　（尼君）（入道と）同じ蓮に住むべき後の世の頼みをさへかけて年月を過ぐし来て　若菜上　4—119

3　（紫の上）消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを

とのたまふ。

（源氏）契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ゐる露の心へだつな　若菜下　4—245

4　（源氏）「（略）よし、後の世にだに、かの花の中の宿りに隔てなくと思ほせ」とて、うち泣きたまひぬ。

（源氏）はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞかなしき

と御硯にさし濡らして、香染なる御扇に書きつけたまへり。宮、

（女三の宮）へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむ　鈴虫　4—376

5　後の世には、同じ蓮の座をも分けんと契りかはしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲なれど、

みのり　4—496

1の「朝顔」の用例は、やや遡ったところからたどってみることとする。源氏は紫の上と、夜更かし藤壷以下四人の女性の評を交わすが、源氏の思いは結局藤壷へと遡る。

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

（紫の上）こほりとぢ石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながかる

（略）髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえめでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

（源氏）かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦のうきねか　朝顔　2—495

中西進氏によれば、[*7] この場面は「長恨歌」の「夕殿蛍飛思悄然、孤灯挑尽未成眠、遅遅鐘鼓初長夜、耿耿星河欲曙天、鴛鴦瓦冷霜華重、翡翠衾寒誰与共」により、「具体的な素材としては、雪と霜の相違はあるが、全体として冷え冷えとした情調はまことによく共通する」とする。また、その夜藤壷を思慕しつつ寝た源氏の夢枕に藤壷が現れて恨み言を言う。藤壷があの密事のため成仏できないでいることを知った源氏は、目的を伏せて諸寺に読経をさせた。そして源氏は、

ものの心を深く思したどるに、いみじく悲しければ、何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、とぶらひきこえに参でて、罪にもかはりきこえばや、などつくづくと思す。　朝顔2―495

ここは諸氏によって「長恨歌」の「忽聞海上有仙山、山在虚無縹渺間、遂教方士慇懃覓」が指摘されている。[*8]「長恨歌」を借りて故人を思慕する表現が続くところではあるが、勿論源氏と藤壷は「連理」「比翼」を誓った夫婦ではなかったし、今となってはそうしたことば自体がむなしい。しかし、だからといって源氏は、それに変わって「おなじ蓮に」と願うこともできない。せめて三途の川での再会を願うより他にないのである。

阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ。おなじ蓮にとこそは、

（源氏）なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ　朝顔2―496

ここで注目すべきは、この世で夫婦でなかったものが「おなじ蓮に」と願うことはできない、という規範が読みとれることである。今生で遂げられなかった思いを「のちの世」で遂げようとする和歌は散見されるものの、少なくとも平安時代において、同じ文脈で来世極楽の蓮の上で遂げようと願う用例は見つけることができない。この時代においては、夫婦＝「おなじ蓮」という結びつきが強かったものと判断されるのである。それは2の用例からも

窺われることで、明石の尼君の語りからは、当時夫婦は死後同じ蓮の台に住むことができるという考えが一般化していたと考えられる。

会話文では4「花の中の宿り」などと、蓮の花に注目した表現が見られるのに対して、露をはかない命に喩えることをいたく好む貴族達の嗜好から、和歌になると「露」と「蓮の葉」にかかわって詠まれることが、『源氏物語』以外の用例でも圧倒的である。『朝光集』(951―995) 93

しらかはどのの八講によるとまりたるくるまに（歌略）かえし

うきよにはまたもかへらでやがてかくはちすのうへのつゆとなりなん

などはその早い例といえよう。また、他に、『拾遺集』二十哀傷1340のように、

左大将済時、白河にて説経せさせ侍りけるに　　実方朝臣

けふよりは露のいのちもをしからずはちすのうへのたまとちぎれば

と、「露」を「玉」と表現する例も見えるが、これには「神々の夜の神秘の創造空間にひそやかにもたらされた天の賜物、という心意が湛えられている」という。[*9]『朝光集』、『拾遺集』の用例はともに一人で蓮花化生することを願う場合である。対して、『源氏物語』に初めて登場する「おなじ蓮に」の用例は、すべて正妻もしくは正妻格、または夫に対して用いられたものである点、確認しておきたい。

以下に、『源氏物語』以降、中世までの用例で注目すべきものを挙げてみる。和歌では男女の「おなじ蓮に」の願いが数多く表出されるが、

ちぎりおきしはちすのうへの露にのみあひみしことをかぎりつるかな52

猶たへむかたなし、はちすのうへにあへ、とあるこそ

このいけにならぶはちすのつゆならばさいはんこともうれしからまし127

あふことをはちすのうへとちぎれどもこの世は猶ぞわすれざりける128

『成尋阿闍梨母集』（国歌大観）

というのは母と息子の例である。『源氏物語』「葵」に「大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」（1―39）という例があるが、今はなき葵の上の両親を慰める源氏のこのことばは、必ずしも極楽での再会を指しているものではない。後に指摘するように、中世になると、家族が「おなじ蓮に」と願う例が少なからず現れてくる。しかし、中古にあってはそうした例は他に見いだしがたく、この『成尋阿闍梨母集』の用例を、その萌芽と位置づけることも躊躇されるのである。ここは、入宋という極めて特殊な状況下で、再会の可能性が非常に危ぶまれる中、成尋が母を慰める方法はこれしかなかったとも考えられるし、また、母と息子の愛情を表現するに当たって、男女の恋情のやりとりの方法を借りているとも考えられる。二者いずれかの用例と解しておきたい。

次に、物語の例では、まず現在確認できているものすべてを挙げてみる。ただし、中世王朝物語の用例は、中世王朝物語全集（笠間書院）の既刊分から拾ったもので、刊行予定の全巻のほぼ半分しか見ていない点、了承願いたい。

1　（帝が藤壺女御に）「露ばかり分くる心なうて、この世には過ぎ果てて、後の世にも同じ蓮に」とのみ、言ひ契らせ給ひつつ、

『狭衣物語』巻四（新全集）

2　（中納言が、尼姫君に）夜もただ御座を並べて、昔今のことどもをかき尽くし、泣きても笑ひても聞こえ尽くし給ひ、「今、行く末も同じ蓮の上に」と、言ふかぎりなき御契りをつくし給ひつつ、仏の御日には、月ごとに経、仏供養せさせ給ふ。　『浜松中納言物語』巻二（新全集）

3　いつかまた蓮のうへにあひもみむ露のやどりに心とまらで　風葉和歌集　516　あひずみくるしき内大臣（国歌大観）

4　（入道関白）いまはただうきはこの世のやみはれておなじはちすの露をむすばん　『いはでしのぶ』（国歌大観）

5　（伊予の守が女君に）君ゆゑにたづぬる法の道なれば同じはちすの身ともならなん　『石清水物語』（新全集）

6　（大納言）こん世まで思ふ心の変はらずは同じ蓮の露と置かれん（略）

（中納言）しるべして蓮の上の友とせんこん世を頼む弥陀の誓ひに　『あきぎり』（中世王朝物語全集1）

7　聖、後の世も隔てはあらじ法の花咲くや昔の契りなるらん

と申し給へば、入道の君、

この世より契り置きてぞ法の花宝樹の上も隔てあらじな　『海人の刈藻』巻四（中世王朝物語全集2）

8　（中納言が仲の君と）いまは憂き世を厭ひ、後の世をだに同じ蓮の縁とならん　『木幡の時雨』（中世王朝物語全集6）

9　（中納言が姫君に）みづからは、この世いくほどならぬことなれば、蓮の露をも明らかに、玉と磨くまでこ

そかたからめ、心のかぎりは行ひて、同じ蓮の座をもわけ奉らん。

『しのびね』（中世王朝物語全集10）

10（白露君）いちはやく迎ひ取りて、同じ蓮の台の中に、父母もろともにものし給はぬ

『しら露』（中世王朝物語全集10）

11（中納言が内侍督に）この世には契りも思はざりけるを、後の世にだに、同じ蓮の露と結ばばや

『雫ににごる』（中世王朝物語全集11）

12（御門が内侍督に）この世こそ思はずならね（ママ）蓮葉の上置く露は隔てざらなん

『同』（中世王朝物語全集11）

13「あな尊や。さらば導き給へ」と申せば少将、「げにも一念随喜とこそ仏は説き給へ。まして武蔵野の草のゆかりならば、同じ蓮か」と宣へば、「うれしき善知識にこそ」とたわぶれけるも、

『住吉物語』（中世王朝物語全集11）

6、7は数少ない男同士の例であるが、これは早く漢詩文にも「難期此土重相見　已契西方共往生」（餞奮然上人赴唐　慶滋保胤『作文大体』）、「常随君前後　宛如弟与昆　願共生極楽　願共謁慈尊」（贈心公古調詩　具平親王『本朝麗藻』巻下）と見えるように、『浄土五会念仏略法事儀讃』所収「往生楽願文」を正しくふまえたものと言えよう。13も冗談めかした男女のやりとりではあるが、同様の範疇に属する。

これらの用例でまず注目すべきは、8、9、11、12のように、この世では遂げられなかった思い（または、遂げられそうもない再会）を、来世極楽の蓮の上で果たそうとするものである。中世に入ると、今生夫婦（または夫婦

となる可能性を残すもの）でなかったもの同士が、来世同じ蓮に生まれ変わろうとする例が少なからず出てくるのである。

他に、10のように、両親と子という例も特筆すべき例である。和文に限らず軍記でも、次のような例が指摘できる。

a　父ガ恋クハ、西ニ向テ、音ヲ泣様ニ、心閑ニシテ、「南無西方極楽教主阿弥陀如来、願ハ父入道殿、我等四人一所へ迎ヘサセ給へ」ト拝マバ、

『保元物語』下　義朝ノ幼少ノ弟悉ク失ハルル事（新大系）

b　（北の方が）西ニ向テ、「南無西方極楽教主阿弥陀如来、願ハ入道ならびに四人ノ子共、我伴ニ一ツ蓮ニ迎ヘ給ヘ」ト拝ツツ、川へ入ラントスレバ、

『保元物語』下　為義ノ北ノ方身ヲ投ゲ給フ事（新大系）

c　今生こそ、宿縁うすくとも、来世には、かならず一蓮にむまれあふべし。

『曽我物語』第二　祐信、兄弟つれて、鎌倉へゆきし事（大系）

d　道にて十郎いひけるは、「名残おしかりつる故里も、一筋に思ひきりぬれば、心のひきかへて、先ゑ（へ）のみぞいそがれ候ぞや。」時致ききて、「さん候。思ふ程は現、すぐれば夢にて、心のままに本意をとげ、うき世を夢になしはてて、はやく浄土にむまれつつ、こひしき父、名残おしかりつる母、かく申我らまで、一蓮の縁とならん」とて、

『曽我物語』第七　李将軍が事（大系）

『保元物語』は、a所領を失い、物乞いをして歩く為義の四人の子の零落した姿を描く。そして、bその子等の処刑を聞き、絶望のあまり川に身を投げて後を追う母の決意。こうした印象的な場面に「一蓮」の願いが配されてい

る。また、『曽我物語』では、c悲運の兄弟の死後を弔うことを約束する継父祐信。そして、d斬罪の窮地を逃れた十郎、五郎の兄弟は、いよいよ仇討ちの本懐を遂げようと、固く誓い合う。悲壮感漂う文脈中、「一蓮」の願いはいやがうえにも憐憫の情を催させる。以上のように、中世には、こうした「家的」とも言うべき蓮花化生の願いが現れてくるのである。

二

ここではまず、中国古代の用例に目を転じてみたい。中国においてハスを表す漢字は非常に豊富で、蓮（花托・全体）、荷（葉、全体）、芙蓉（花）、芙蕖（全体）、菡萏（蕾、花）、遯（葉）茄（茎、全体）、的（実）、薏（実の中の幼芽）、藕（レンコン）、蔤（這い根）と多くを数えるのは、食用にも供するなど、生活と密接に結びついていたからである。[*10] そして、漢詩文での詠まれ方の特徴としては、

1　夏の花で最も愛されたもの。折から暑さも加わる時期、地上を吹くそよ風に揺れるハスの花は、それだけで人の目に、一陣の涼味を送る。

2　唐代以前には女性の面影を秘めて艶情を漂わせるものであった。（文選十九　洛神賦　曹植　など）。

3　「蓮」が「憐」と同音であることから、恋愛の暗喩として用いられる。

4　六朝期南方の民間歌謡の中には、蓮根や蓮実を採取する時歌われる、一種の労働歌（原初的な蓮曲）の主題があった。ハスの実の採取は菱の実採りとともに女性の仕事である。

5　宋代になると、加えて士人の高雅な胸襟の象徴ともなる。

などが挙げられるが、[*11] 特に1、3、4が結びつく過程で、初夏（または晩春）の水辺で、ハスの花を摘む美しい乙女を詠じた南北朝時代南朝の楽府「採蓮曲」が発展した。そして、採蓮をモチーフにした作品群から、「同心蓮」という語の用例が見られるようになってくるのである。

・「願並迎春比翼燕、常作照日同心花」　江総「秋日新寵美人応令」（『先秦漢魏晋南北朝詩』陳詩巻八）

・「灼灼荷花瑞。亭亭出水中。一茎孤引緑。双影共分紅。色奪歌人臉。香乱舞衣風。名蓮自可念。況復両心同。」　杜公瞻「詠同心芙蓉詩」（『先秦漢魏晋南北朝詩』隋詩巻六）

・「青荷蓋緑水、芙蓉発紅鮮、下有並根藕、上生同心蓮」　青陽歌曲　（『玉台新詠』巻十）

・「贈子同心花、殷勤此何極」　唐・郭元振「子夜四時歌」（『楽府詩集』巻四十五）

・「妾家越水辺。揺艇入江煙。既覓同心侶。復采同心蓮。折藕絲能脆。開花葉正円。春歌弄明月。帰棹落花前。」　相和歌辞　采蓮曲　徐彦伯　（全唐詩巻二十一）

・「双棲緑池上。朝暮共飛還。更憶将雛日。同心蓮葉間。」　池上双鳥　薛濤　（全唐詩巻八百三）

唐徐堅『初学記』巻二十七芙蓉第十三の事対に「同幹　駢花」、唐欧陽詢『芸文類聚』巻八十二芙蕖にも「宋起居注曰、泰始二年、嘉蓮一双、駢花並実。合樹同茎。（中略）詩　梁朱超詠同心芙蓉詩曰（中略）未及清池上、紅蕖並出房、日分双帯影、風合両花香」と見え、同一の芯に二つの蓮花が咲くことで、男女の相親しむ情を表す。また、「同心」は『毛詩』巻第二　邶風、谷風に「僶俛同心。不宜有怒」、『白孔六帖』巻十七　夫婦「同心　僶俛同心」[*12] とあるところから、心を同じくする夫婦のような蓮の意となる。本朝では風俗慣習の違いから労働歌「採蓮曲」が

定着することはなく、近いイメージとしてはわずかに『文華秀麗集』巻上遊覧に、「夏日臨泛大湖　一首　御製（嵯峨天皇）」の「水国追涼到。乗舟泛大湖。風前翻浪起。雲裡落帆孤。浦香濃盧橘。洲色暗蒼蘆。邑女採蓮伴。村翁釣魚徒。畏景西山没。清猿北嶼呼。沿洄興不已。弭棹転帰艫。」を見る程度であるが、「同心蓮」の語は確実に本朝にも伝わっていた。

・「莫言花重船応没　自解凌波不畏沈　　楊師道　採蓮発句云、採蓮江浦覓同心、日暮風生江水深　同心者蓮名也」　（『千載佳句』下　採蓮　655『国立歴史民族博物館蔵貴重古典籍叢書第21巻』）

・「化煙之跡難遂、指星之誓已違。蓮失同心、相対之花不見。鳥離比翼、争啼之雛空遺。」参議雅信為亡室天暦八年八月　（『言泉集』亡夫帖・亡妻帖『貴重古典籍叢刊6　安居院唱導集』上巻）

前者楊師道の作品は、中国では早く伝承が絶え、大江維時（888～963）の『千載佳句』に摘句されたことによって残されたもの。唐人の詩から七言の佳聯を抄出して部類分けをした、いわば作詩参考書に見える点、注目に値する。また、後者の願文は源雅信（920～993）が亡き妻を追善した時のもので、「蓮失同心、相対之花不見」とあるのは、明らかに妻＝「同心蓮」のことを指している。願文は「博士の（略）願文、表、ものの序など作り出してほめらるゝも、いとめでたし」「文は文集。文選、新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。」（『枕草子』八四段、一九七段　新古典大系）とあるように、平安期において最高の文学の一つとされ、特に追善のそれは法会に列席する貴族達の涙を誘った。[*13] 膨大な作品が作成される中、「参議雅信為亡室」の一節は、伝承絶えることなく鎌倉まで受け継がれている。『言泉集』は後の安居院流が願文等を作成する際、手引き書として使用したものである。以上、わずか二つの用例ではあるが、その載録先の性質からいって、少なからぬ人々の目に触れたこと、疑いがない。

また、両者ともに「おなじ蓮に」の願いが初出する『源氏物語』成立のほぼ半世紀前であることも、重要な意味を持つであろう。

『浄土五会念仏略法事儀讃』所収「往生楽願文」の一節が、ことさら男女、とりわけ夫婦に対して用いられるに至った過程に、漢語「同心蓮」の影響を想定してみたい。先に挙げた用例の1『狭衣物語』に「後の世にも同じ蓮に」、2『浜松中納言物語』に「今、行く末も同じ蓮の上に」とあるのも、今生夫婦であること＝並んで咲く蓮というイメージの現れと考えられよう。そもそも、これほど後によく知られるようになった願いが、なぜほとんど仏家に無視され続けてきたのかが不審である。少なくとも鎌倉期までの仏教説話で、一蓮托生した例など寡聞にして知らない。本朝浄土系の聖典類にも、そうした言及は見あたらない。男女一対の極楽往生という、きわめてユニークな仏教的輪廻転生観の成立には、こうした非仏教的な要素が介在したと考えたいのである。厳密に言えば、「往生楽願文」に言うのは一輪の花、「同心蓮」は二輪の花であるが、平安中期の人にとって、夫婦は一つ芯に並んで咲く花というイメージが平行してあったことによって、この異質なものが一つになったのではなかろうか。

平安時代の貴族が、「同心蓮」を実際に知っていた例として、「祥瑞」としての「嘉蓮」を指摘しておきたい。『延喜式』巻第二十一治部省に「祥瑞」が分類されているが、「嘉蓮」は「連理」と同じく下瑞の一つである（「比翼」は大瑞）。「嘉禾」の一種で、「王者徳盛、則二苗共秀」という。こうした考えは勿論中国からもたらされたものであるが（資料2参照）、本朝の正史にもその記述が見える。

『日本書紀』

巻二十三　舒明天皇　七年七月　瑞蓮生於剣池。一茎二花。

巻二十四　皇極天皇　三年六月六日　戊申、於剣池蓮中、有一茎二萼者。豊浦大臣妄推曰、是蘇我臣将来之瑞也、即以金墨書、而献大法興寺丈六仏。

『続日本紀』

巻六　和銅六年十一月十六日　大倭国献嘉蓮。近江国献連理十二株。

巻三十四　宝亀八年六月十八日　楊梅宮南池生蓮。一茎二花。

『三代実録』

巻十八貞観十二年七月九日　九日己未。従四位下行伊勢守多治真人貞峯献蓮一茎二花。

『日本紀略』

後編十　一条　長保元年七月十一日　大宰府申一茎二花白蓮。（『百練抄』『神皇正統録』にも）

ここに言う「嘉蓮」「一茎二花」は、間違いなく「同心蓮」のことであり、それは貴族達の一関心事でもあったのである。かれらは実際に「同心蓮」を目撃していた。[*14]

おわりに

和製漢語「一蓮托生」の成立時期は明らかでない。現時点で確認できた最も古い用例は、中院通勝『岷江入楚』の「契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ゐる露の心へだつな（略）聞一蓮托生の心後世を契る也／箋各留半座乗花

台なと、て夫婦は一蓮を契る也是も凶なる哥也あしからんとてはかゝる事ある也」（桜楓社第三巻・五四二頁）であるから、少なくとも中世まで遡ることができよう。鎌倉時代以降の用例の特徴としては、特に軍記物語において、「おなじ蓮に」が、圧倒的に「一蓮（ひとつはちす）に」となっている点が上げられる。

・かならずひとつ道へとおぼしめすとも、生かはらせ給ひなんのち、六道・四生の間にて、いづれのみちへかおもむかせ給はんずらん。ゆきあはせ給はん事も不定なれば、御身をなげてもよしなき事也。　注「ひとつ道」元和版「一蓮」　『平家物語』巻第九　小宰相身投

・「南無西方極楽世界教主弥陀如来、本願あやまたず浄土へみちびき給ひつつ、あかで別れしいもせのなからへ、必ひとつはちすにむかへたまへ」　『同』巻同　小宰相身投

・「契あらば、後世にてはかならずむまれあひたてまつらん。ひとつはちすにといのり給へ。日もたけぬ。奈良へもとをう候。武士のまつも心なし」とて出給へば、北方袖にすがッて、　『同』巻第十一　重衡被斬

・このやうに様をかへて参つたれば、日ごろのとがをば赦させられい。赦さうと思はせられば、もろともに念仏を申して、一つ蓮の身とならうず。『天草本　平家物語』巻二　第一　祇王清盛に愛せられた事、同じく仏といふ白拍子に思ひ代へられて後、親子三人尼になり、世を厭うたことと、又その仏も尼になつた事。（岩波書店　1927.6.28）

・せめての事に母泣々、闇路にも共に迷はで蓬生に独り露けき身をいかにせんと、娘の文に書そへてぞ詠じける。其後母は尼になり、天王寺に参篭して、唯疾命を召し、浄土に導給へ、救世観音、太子聖霊悟を開て、無人の生所を求め、一仏蓮台の上にして、再び行合はんと祈念しければ、

『源平盛衰記』　有朋上P639　津巻　第十九　文覚発心附東帰節女事

・人間ニ帰ラバ、再ビ夫婦ノ契ヲ結ビ、浄土ニ生レバ、同蓮ノ台ニ半座ヲ分テ待ベシ。」

『太平記』頼員回忠事

・「後生善所、亡き人と一仏浄土」と念じつつ

『曽我物語』真名本系　新全集　巻第十　虎、箱根の別当を戒師として出家する事

・思ひを西方の暮雲に寄せ、心を九品の暁楽に懸けて、忽ちに娑婆の別離を翻し、浄土再会の縁となしにけり。

『同』巻第十　三周忌の法要　母、往生を遂ぐる事

・今生こそ、宿縁うすくとも、来世には、かならず一蓮にむまれあふべし。

『曽我物語』仮名本系　大系　第二　祐信、兄弟つれて、鎌倉へゆきし事

・一蓮の縁をもねがはん。

『同』大系　第六　曽我にて虎が名残をしみし事

・かれらが後世も、などや一蓮にのらざ覽。

『同』大系　第六　仏性国の雨の事

・道にて十郎いひけるは、「名残おしかりつる故里も、一筋に思ひきりぬれば、心のひきかへて、先ゑ（へ）のみぞいそがれ候ぞや。」時致ききて、「さん候。思ふ程は現、すぐれば夢にて、心のままに本意をとげ、うき世を夢になしはてて、はやく浄土にむまれつつ、こひしき父、名残おしかりつる母、かく申我らまで、一蓮の縁とならん」とて、

『同』大系　第七　李将軍が事

・さらば、みづからをもつれ、一蓮の縁になしたまへや。

『同』大系　第七　三井寺大師の事

・一念の菩提心あやまりたまはで、一蓮の縁となし給へ。

『同』大系　第七　祐経にとどめさす事

・われらまでも、一蓮の縁をむすばばやと思ひ候也。　『同』大系　巻十二　虎いであひ、呼び入し事

・みな成等菩提因縁なりぬべし。偕老同穴のちぎり、誠あらば、九品蓮台の上にては、もとのちぎりをうしなはず、一蓮に座をならべ、解脱の袂をしぼるべし　『同』大系　巻十二　母、二宮にゆきわかれし事

今回確認した中では、『太平記』を除くすべての用例は「一蓮（ひとつはちす）に」となっている。[*15] さらに他に、『平家物語』巻第十一「重衡被斬」に「只今の最後の念仏によて九品託生をとぐべし」、『私聚百因縁集』一ノ三に「蓮華の台に託生し」などとあるところからして、中世に入って「一蓮托生」の語が成立するのは時間の問題であったと考えられる。

以上、中世までの用例を概観してきた。出典の法照「往生楽願文」に言う「同行人」を正しくふまえた例も散見されるが、それを除けば、「おなじ蓮に」の願いは、漢語「同心蓮」の影響から、始め夫婦に限定されていたと考えられる。それが次第に親子や一家、また一方では今生で思いを遂げられなかった男女の切ない願いへと用法を広げていった、と結論づけたい。

本論は、さらに降って、近世近松浄瑠璃の用例を取り上げてしめくくりとしたい。

・何ぐどぐどと思ふぞや。これぞ一蓮托生と、慰めつ。又慰に、比翼煙管の薄けぶり霧も絶え絶え晴れ渡り、むぎの葉生えに風荒れて、朝出の賤や火を貰ふ。　『冥途の飛脚』下之巻　道行　相合駕籠

・この水は極楽の八功徳池の水と思ひ、雨甘露法雨愍衆生故と聞く時は、これを飲んで心身を潤し、九品の浄刹に往生し、半蓮を分けて待つてゐや。　『夕霧阿波鳴渡』下之巻　あひの山

・時は違ふと日は同じ日、最期所は変るとも、来世は一つ蓮葉に、長き契りをめでたくかしく。

『山崎与次兵衛寿の門松』　中巻　浄閑屋敷露地の場

・神や仏にかけおきし、現世の願を今ここで、未来へ回向し、後の世も、なほしも一つ蓮ぞやと、爪繰る数珠の百八に、涙の玉の、数添ひて、尽きせぬあはれ、尽きる道。

『曾根崎心中』　道行

・月は白みて暁の、あれ明星もさしのぼる。近づく最期一筋に、一つ蓮と願へども、思へば我が身の咎。

『心中二枚絵草紙』　下之巻　知死期の道行

・お亀はつねづね信仰の、南無観世音菩薩様、母様の戒名教誉珠林信女、一つ蓮に導き給へ。

『卯月紅葉』下之巻　梅田堤の場

・いつの世にかは一対の、一つ蓮に生まるべき。

『卯月の潤色』下之巻　助給書置の場

・南無妙法蓮華経、南無妙法蓮花を一つ蓮花にと、ぐつと突き抜く一刀、わつと叫びし一声の、あはれはかなき最期なり。

『心中重井筒』下之巻　高津大仏殿勧進所の場

・そなたは母の形見を持ち、我は父の骨の側、夫婦、親子一蓮の、示しの時刻延ばされず。

『心中万年草』下之巻　高野山女人堂の場

・我々が一つ蓮は一ぢやうぞ、往生浄土は一寸も伸べも縮めも、サアよいか

『今宮の心中』下之巻　戎の森の場

・有縁無縁乃至法界、平等の聲を限りに、樋の上より、一蓮託生、南無阿彌陀仏と、踏みはづし、しばし苦しむ。

『心中天の網島』下之巻　網島の場

・そなたにおれが異見するも貝の業。一蓮托生の閨のお同行と、戯れて機嫌を取りければ。そんならマアこなた参らしやれ　『心中宵庚申』下之巻

・ずつと今度の其の。先の世までも夫婦ぞや。一つ蓮の頼みには。　『同』下之巻

・なう、お千世、この毛氈を毛氈とな思はれそ。二人が一所にのりの花、紅の蓮と観ずれば、一蓮托生、頼みあり。　『同』下之巻

・連理の蓮かたしきて。ながき契りを待つぞや待たんしるしはこれ。　『けいせい反魂香』　三熊野かげろふ姿

『冥途の飛脚』の「比翼」、『けいせい反魂香』の「連理」が「長恨歌」によること言うまでもなく、また、『曾根崎心中』では曾根崎天神の森の、松と棕櫚の相生を連理の契りになぞらえて、その下で最期を遂げている（『心中二枚絵草紙』にもこの木のことが出てくる）。『卯月の潤色』下之巻「助給書置の場」引用の直前に「鴛鴦のふすま障子」とあるのも、同様に「長恨歌」による表現である。生前の「長恨歌」、死後の「一蓮托生」というのは、『源氏物語』以降、およそ六〇〇年以上の時を隔てて底通する。

モーリス・パンゲ氏は名著『自死の日本史』（筑摩書房　昭和六一年五月　後に、ちくま学芸文庫）の中で、近世浄瑠璃に「心中もの」が成立する要因として、次のような点を挙げている。

1　前提として、阿弥陀の広大無辺な慰めの存在。

2　封建的家族制の閉塞状況。

3　快楽肯定性。（西洋のように、精神的愛を道徳的価値の高所に位置させない。遊女と色好みな男との関係が

受け入れられる土壌。）

4　意志的な死という精神性。

特に4に関してパンゲ氏は、「どうにでもなる言葉や仕種に対して懐疑的である日本人は、愛の保証をまことしやかな言説に委ねようとはしなかった。ここでもまた、彼らはひとつのコードを作り出す。言葉のではなく、意志的な行為に身を投げ入れることによって、心はありのままの姿を開き、表すことができると考えられた」と述べる。本論は主に1に関連したものであったが、死に行く男女の「愛」までもが極楽で約束されるというのは、仏教文化圏の中でも、日本だけと言っていいだろう。そして、それは一方で曲解された三世思想の深化の過程をいくらかは意味しながらも、かえって現世での理想的な「愛」を立証するという役割を果たしている点においては、平安時代以降一貫したものがあるのである。来世での一蓮托生が確約されるほど、今生での男女の心は真実であったという証である。近松は言う。「貴賤群集の回向の種、未来成仏疑ひなき、恋の手本となりにけり」（『曽根崎心中』）。「厳格な信仰が否定する美的陶酔[*16]」の中での死をクライマックスとし、それまでの二人の生き様が、至上の恋の具現であったと確信される。中世までの人がその時を自然死に任せたのに対して、生の意味への渇望から、男女が原則として同時の、意志的な死＝「自死」を最後に選んだ時、「心中」という、全く新たな蓮花化生のあり方が近世に生じた、ということなのであろう。

注

＊1　以上、「五会念仏」及び法照に関しては、五十嵐明寶氏『浄土五会念仏略法事儀讃』（永田文昌堂　平成一三年七月）による。

＊2　足立喜六氏訳注塩入良道氏補注東洋文庫A2『入唐求法巡礼行記2』（平凡社　昭和六〇年二月）、井上光貞氏『新訂　日本浄土教成立史の研究』（山川出版社　昭和五〇年　二月）

＊3　久保田淳氏馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店　平成一一年五月）「後の世」藤田一尊氏解説

＊4　『小馬命婦集』の歌は、現存する詞書の杜撰さによって、贈答の対象がわかりづらいところがある。表掲載歌のやや前から挙げてみると、まず、

そきやう殿の宮女べたうの許より、「とし月ふれどたいめんすべきこともなきこと」とあれば、夏、齋宮女別当にかうなんきこえたりし、「こよひこそきこゆべかりけれ」とて、

52いかにせんゆかずはあはじこじはみじいくよをかぎる命ともなし

斎宮女御、祭主能信をめして、「これが返事せよ」とおほせられければ

53ゆかずともこずともあはでやまばやめこの世とのみはちぎらざりしを

女べたう

54あひもみず命もしらずつきもせず恋のみ山となりぬばかりぞ

かへし

55しげからば恋のみ山も入りてみん枝をかはせるかげはありやと

とある。『深養父集　小馬命婦集』（藤本一恵氏　木村初恵氏　私家集全釈叢書24　風間書院　平成一一年八月）では55は「長恨歌」の「在天願作比翼鳥。在地願為連理枝」をふまえ、小馬命婦は女別当への交情を男女の恋に擬して詠んでいるとするが、ここは同じく白居易「長相思」の「願作遠方獣、歩歩比肩行。願作深山木、枝枝連理生」を挙げるのがより適切であろう。これ以降は、詞書がより妥当と思われる『能信集』（921～991）によれば、

又、返し、馬こそ

われゆゑははちすの上をきてもとへあはれいづこに君をたづねむ
また、返ししはべる
あなうらのはちすに君がやどりせばなににかさらにたづねまどはむ

とあり、前者は「長恨歌」の「遂教方士慇懃覓」による（私家集全釈叢書24に指摘。『能信集』の本文は、増田繁夫氏　私家集注釈叢刊7『能信集注釈』日本古典文学会貴重本刊行会　平成七年一〇月によった）。長恨歌と浄土思想が結び付けられる、かなり早い例といえる。

＊5 『為頼集』（～998）の「としごろあひそひたる人」は為頼室。「ははの女御」は村上天皇女御荘子。為頼の従姉妹。「契りしこと」は女御荘子が為頼室と約束したこと（筑紫平安文学会著　私家集全釈叢書14『爲頼集』風間書院　平成六年五月）。

『赤染衛門集』は永祚元年（989）頃の作（当時八〇歳頃）。「おなじ人」は大江為基。生没年未詳。平安中期の歌人。文章博士。三河守を経て摂津守となったが、病のため永祚元年（989）図書権頭に遷される。若い頃赤染衛門と恋仲（角田文衛氏監修『平安時代史事典』角川書店　平成六年四月）。「薬王品」とあるのは、『法華経』巻第七「薬王菩薩本事品第二十三」の「若有女人聞是薬王菩薩本事品。能受持者。尽是女身後不復受。若如来滅後後五百歳中。若有女人。聞是経典如説修行。於此命終。即往安楽世界阿弥陀仏大菩薩衆囲繞住処。生蓮華中宝座之上」をふまえる（関根慶子氏他私家集全釈叢書1『赤染衛門集全釈』風間書院　昭和六一年九月）。後江相公（大江朝綱）「為左大臣息女女御四十九日願文」（天暦元年947一一月二〇日）は新間一美氏「白居易の長恨歌―日本における受容に関して―」（白居易研究講座第二巻『白居易の文学と人生Ⅱ』勉誠社　平成五年七月）、慶慈保胤「為大納言藤原卿息女女御四十九日願文」（寛和元年985閏八月二日）は渡辺秀夫氏「願文の世界」（『平安朝文学と漢文世界』勉誠社　平成三年一月）、後江相公（大江朝綱）「重明親王為家室四十九日願文」（天慶八年945三月五日）は柿村重松氏　新修版『本朝文粋注釈』（富山房　昭和四三年九月）をそれぞれ参照した。

なお、本論の「長恨歌」とは、白居易「長恨歌」、唐陳鴻「長恨歌伝」、宋楽史「楊太真外伝」、「長恨歌序」の一群を指して言う。

他に、平安中期の「長恨歌」の物語の流行を示すものとしては、説話集では、『注好選』漢皇涕密契第一百一がある。

＊6 以下、『源氏物語』の本文は、すべて小学館の新古典全集による。

＊7 『源氏物語と白樂天』（岩波書店　平成九年七月）。

＊8 丸山キヨ子氏『源氏物語と白氏文集』（東京女子大学学会　昭和三九年）など。

＊9 渡辺秀夫氏『詩歌の森』「露」（大修館書店　平成七年五月）。

＊10 寺井泰明氏『花と木の漢字学』（あじあブックス　大修館書店　平成一二年六月）

＊11 松浦友久氏編『漢詩の辞典』（大修館書店　平成一一年一月）、佐藤保氏『漢詩のイメージ』（大修館書店　平成四年一〇月）、植木久行氏『唐詩歳時記』（講談社学術文庫　平成七年八月）、寺尾義雄氏『中国文化伝来事典』（河出書房新社　新装新版平成一一年一月）

＊12 夫婦の意としての「同心」の用例は、亡室追善の願文類に頻出する。

「合歓之交漸久、同心之儀既旧。左大臣殿為亡室」、「斉眉之礼不軽、同心之儀是思。実家左衛門督為亡室」「二十年合歓同心儀年旧。左衛門督為亡室修善」、「合歓思未変、自少至壮。同心儀不改、当暮春下旬。前伊賀守仲範入道為亡室修善」、「夜帳暁窓所期者百年之偕老、春風秋月所契者一生之同心。右大将顕忠亡室七七日　天徳二年（958）」、「同心之好星霜二十有三、遺体之孤男女一十余二。左少将源朝臣　応和四年（964）三月」以上、金沢文庫本『言泉集』亡夫帖・亡妻帖。「合歓昔扇、生解脱清涼之風。同心夜衾、破妄相顛倒之夢。」巻二　前女御道子逆修願文、「合歓同心之結芳契也。」巻五　讃岐前司室家多宝塔、「同心合歓之契、於今永絶。孤夢再会悲、歴歳難忘。」巻五　奉為故博陸殿室家被供養自筆法華経願文、以上『江都督納言願文集』。

＊13 「合歓」との対句が多いのは、班婕妤の合歓扇と趙飛燕の同心扇の故事をふまえた、佚存叢書『李嶠雑詠』「扇」の「還取同心契、特表合歓情」や、『遊仙窟』十娘の「合歓遊璧水、同心侍華闕」の影響であろう。

渡辺秀夫氏「願文の世界」（『平安朝文学と漢文世界』第四篇　勉誠社　平成三年一月）、小峯和明氏「『江都督納言願文集』の世界一～五」（『中世文学研究』一三～一七）、後藤昭雄氏「文は、願文・表・博士の申文」（『和漢比較文学叢書』12　汲古書院　平成五年一〇月）、拙稿「造寺供養願文の世界」（『和漢比較文学叢書』18

平成六年八月）など。

＊14　他に、重文「観世音寺天蓋光心銅鏡拓影」には数種の祥瑞が描かれるが、中に「合歓蓮」とあるのはこの「同心蓮」のことを指す。なお、同鏡には「同心鳥」というものも見える（以上、新間一美氏のご教示による）。

＊15　検索には国文学研究資料館「日本古典文学本文データベース（実験版）」（岩波書店　旧版『日本古典文学大系』所収全作品　http://www.niji.ac.jp）、荒山慶一氏「中世軍記物語」（J―TEXT日本文学学術的電子図書館　http://www.j-text.com/）を利用させていただいた。

＊16　佐々木久春氏「死と愛―『曾根崎心中』を支えるもの」（『近松文芸の研究』泉書院　平成一一年二月）

本論は、第73回和漢比較文学会（西部）例会（平成一三年一一月一〇日　於甲南女子大学）で口頭発表したのをもとに成稿したものです。席上ご教示頂いた新間一美氏、本間洋一氏に心より感謝申し上げます。また、口頭発表に先立ちまして、北海道説話文学研究会のメンバー、川上徳明氏、萩原正樹氏、林晃平氏より貴重な御助言を賜りました。

資料1

このよには人ごとしげしこむよにもあはんかならずいまならずとも／こんよにもはやなりななんめのまへにつれなきひとをむかしとおもはむ／うつせみのよのまたのよにむまれてもおもはんなかはたえじとぞ思ふ／このよにて君をみるめのかたからばこんよのあまとなりてかづかん『古今六帖』五　3127～　高田女王	長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひて其の所々をとませ給ひける御手にて（略）帰来て君おもほゆる蓮葉に涙の玉と置きゐでぞ見る／月も日も七日	（このよにもあはずなりなばこんよにもあはんかならずにしのじようどに『古今六帖』五　3131　藤原忠房）

の夜の契をば聞きし程にも又ぞ忘れぬ／木にも生ひず羽も並べて何しかも波路隔て君も聞覧
『伊勢集』

生きての世死にて後の後の世も羽を交わせる鳥となりなむ／あきになる言の葉だにも変らずはわれも交せる枝となりなむ
『村上御集』『大鏡』
師尹『童蒙』

ふる事はかたくなるともかたみなるあとはいまこむ世にもわすれじ

（又、返し、馬こそ われゆゑははちすの上にきてもとへあはれいづこに君をたづねむ／また、返ししはべる　あなうらのはちすに君がやどりせばなにかさらにたづねまどはむ『能信集』
『小馬命婦集』）
（としごろあひそひたる人なくなりわたるころ、中つかさの宮のははの女御の御

養在深窓、外人不識。蕙心春浅、未及二八之齢。蘭質秋深、初備三千之列。常念、一家之子孫、付門戸於其顧、満園之草木、期栄枯於彼恩。楽未央哀先至、福漸始禍早成。（略）漢宮入内之夜、傍花聳而成歓。（略）綿綿此恨、生生何忘。（略）今弟子揮涕、欲開九品於西極楽之地。今日一念、於是而尽。為左大臣息女女御四十九日願文　後江相公／弟子有一息女。最所鍾愛也。素思進燕寝。不欲混俗塵。（略）清涼之春花、日遅或賜共翫。弘徽之秋月、夜永不許独看。（略）弟子欲訪旅魂而未由、故図金人以為使。将通音信而無便、兼写宝偈以代書。（略）弟子早引幽霊。偏在極楽。弥陀尊之設蓮台。望上品又仰下品矣。為大納言藤原卿息女女御四十九日願文　慶慈保胤／猶添窓中恋古之恨。鴛鴦衾空。向旧枕而湿袂。（略）以此恵業、訪彼幽霊。仰願功徳池上、結妙果於開示之蓮、安楽界中、挙覚花於弥陀之樹。重明親王為家室四十九日願文　後江相公　以上『文粋』巻第十四
化煙之跡難遂、指星之誓已違。蓮失同心、相対之花不見。鳥離比翼、争啼之雛空遺。　参議雅信為亡室　天暦八年

『道信集』110
　ちぎりありてこのよにまたはうまるともおもがはりしてみもやわすれむ『後拾遺』四566　実方
この世にはつらき心も知りはてぬ契りしのちの世をも見てしが『うつほ物語』
　いにしへとけふとのことをはしにつけのちの世までにおもひわたらん『兼澄集』106

長恨歌、当事好士和歌よみしに、十首、
　たなはたやしらはしるらむあきの夜のなかき契はきみもわすれし『道済集』
　或人の長恨歌楽府のなかに、あはれなることをえらびいだして、これがこころばへを廿首よみて

もとより　この世にて契りしことをあらためてはちすのうへの露とむすばん『為頼集』）

（おなじ人わずらひしころ、薬王品を手づから書きて、「これ形見にみよ。苦しきを念じてなむ書きつる。後の世にかならずみちびけ」といひたりしに　此世より後の世までと契りつる契りはさきの世にもしてけり／返しためもと　程遠き此の世をさしていにしへにた

（954）八月『言泉集』亡夫帖・亡妻帖

おこせたりしに　（略）たづねずはいかでかしらむ
わたつうみの波間にみゆ
るくものみやこを／かつ
みるにあかぬなげきもあ
るものをあふよまれなる
たなばたぞうき　（以下
略）

同長恨歌にあはれなる
事ありしをかきいでて、
歌十六をよみくはへてや
る　おぼろけのちぎりの
ふかきひととぢやはねを
ならぶる身とはなるらむ
／さしかはしひとつ枝
にとちぎりしはおなじみ
やまのねにやあるらむ
『大弐高遠集』

れことづてしてまづ契りけ
ん　『赤染衛門集』）

（優婆塞が行ふ道をしるべ
にて来む世も深き契りたが
ふな『源氏』夕顔）

契りおかむこの世ならで
も蓮葉に玉ゐる露の心へだ
つな（若菜下）

はちす葉をおなじ台と契
りおきて露のわかるる今日
ぞかなしき／へだてなくは
ちすの宿を契りても君がこ
ころやすまじとすらむ（鈴
虫）『源氏』

ありしこそ限りなりけ
れあふ事をなとのちの
よとちきらさりけん

さきだちしよそになるとも
かのきしのはちすのうへは
つゆもへだてじ『下野集』

『後拾遺』十　哀傷
538　源兼長

資料2

○并蒂同心
（略）用來比喩夫妻相親相愛、情投意合、男女好和。

○并蒂蓮（并頭蓮）
（略）常用來比喩恩愛的夫婦、相親相愛、情投意合。

孟君編撰『中華祥瑞図典』(團結出版社　2001.7) よりもと簡体字。